

栗林純子

最初に、この本は犬のしつけに関するハウツー本ではありません。

ハウツー本なら世の中に有り余るほど流通しています。DVDやネットを含めれば情報があふれ返っているほどです。

情報がありすぎるために、相対する意見などもあり、世の中の飼い主さんは混乱するばかり。

何を信じたらいいのか飼い主さんが迷っているがために、犬も混乱してなかなか問題行動を改善できず、ドッグトレーナーに依頼してくる方も多くいます。

ハウツー本を読むだけで犬のしつけができるなら、ドッグトレーナーである私への仕事の依頼は実際もつと少ないはずですよ。

この本では「犬のしつけ方」ではなく「犬は皆さんが思っている以上に、賢く考えている生き物であり、その犬の能力を引き出してあげるのも、ダメにしてしまうのも飼い主さん次第だということ」をお

伝えたいと思います。

「たかが犬」なんて絶対に思わないでください！

そのレッテルを貼ってしまったらそれまでです。

犬の可能性を信じて広げられるかどうかは、飼い主さんにかかっているのです。「犬って本当にすごい！」のです。

知っていますか？

犬はオスワリ・フセ・マテと同じように、指示で排泄をコントロールできることを。

犬がおなかを出すのは服従を意味しているわけではないということを。

犬がオオカミの子孫か断定はできず、実はオオカミの群れもリーダーを必要としていないという説があることを。

ワクチンプログラム終了を待つてからの社会化では、犬の人生を左右しかねないリスクがあることを。

お留守番向き（一人暮らし向き）の犬なんていないことを。

犬は反省をしないことを。

触られるのが嫌いな犬もたくさんいるということを。

ベッドとトイレが半分ずつという環境が、寝床を汚さないという犬の習性を無視していることを。

ハッキリ言つて犬にとつて、お手・おかわり・フセ・オスワリなんて朝飯前。もつといろいろなことができますし、その学習に威圧的な態度は不要です。

私が犬のしつけの世界に入ったのは、10年以上前のこと。

元々は普通の会社員でした。手に職をつけたい、自分にしかできない仕事がしたいと模索したのがきっかけでドッグトレーナーという仕事に出会いました。

当時、「上下関係」「主従関係」「リーダー説」という言葉は便利で、教える側も説明しやすく一般的に使われ、飼い主さんもその一言を言われると何となく納得させられてしまうので、私自身も、過去にはこの学説に基づいて説明をしてきたこともあります（今となつては反省すべき苦い過去です。昔の生徒さんたち、ごめんなさい）。

過去には、プロフェッショナルにしか犬の問題行動修正はできないといわれてきましたが、果たしてそれでいいのでしょうか？

だって、ドッグトレーナーではなく飼い主さんが飼っている犬ですよ！

しつけやトレーニングは誰にでも実践可能なものであるべきじゃないでしょうか？

必要なのは、最新の正しい情報と知識、それから飼い主さんがスキルアップするための練習。

しつけやトレーニングは、ある意味、楽器の練習や何かのお稽古ごとと同じだと私は思っています。

ドッグトレーナーは犬の先生ではなく、飼い主さんに「犬の飼い方や接し方の基礎を教える立場」「犬の習性を知り、それを理解した上で、問題行動修正の助言をする者」であって、犬だけを修正しようと思つてはいけないと思うのです。

私の仕事は、最新の正しい情報を飼い主さんに提供し、犬にしてほしいと思う行動がどうやったら起こりやすくなるのか？ 問題行動を予防するために、環境をどう改善すればいいのか？ 犬をどのタイミングで褒めるのか？ 飼い主さんが善かれと思つてとっている行動が、犬の行動にどう影響を与えているのか？ といったことを見極め、お伝えしアドバイスをすることです。

ドッグトレーニングの世界も他の業界と同じ日進月歩で、応用行動分析学や、動物行動学、臨床行動学などによって、犬の学習の仕組みが年月とともに科学的に解明されてきました。

どんな世界にも情報のアップデートが必要で、事实は研究とともに変わるものです。生き物には「最初に見たり感じたりしたことを真実だと思おうとする」という習性があるので厄介ですが、実は、前述したように「犬がおなかを出す＝服従している」ではありませんし、当然「お留守番向きの犬や一人暮らし向きの犬」なんていません。そして近年では「犬はオオカミの子孫と確定はできず、そもそもオオ

カミもリーダーを必要としていない」という説が科学的に解明されてきています。

私自身も、当初は「犬との関係で大切なのは上下関係であり犬にはリーダーが必要」といった考え方を拭い去るのには抵抗がありました。自分の犬と生徒さんの犬が大いに力を貸してくれました。

いまだにテレビなどで、犬を押さえ込んで我慢を強いたり、「服従させなければならぬ。飼い主はリーダーであるべきだ」など、犬に精神的・肉体的苦痛を押し付けたりする方法が当たり前のようにわれていますが、あらためるべき時代が来ています。

最新の科学的根拠に基づいた正しい情報を柱に、犬にフェアなトレーニングをすることが必要なのです。

もっとお互いがお互いを好きになれるトレーニングをしましょう。

バカ犬、ダメ犬なんていません。

学習の差はあれど、犬の可能性を伸ばすかどうか、飼い主さんのしつけと練習と努力次第です。

犬の習性を知り、観察し、正しい行動が起こりやすくなるよう、プロの力を借りてスキルアップしましょう。

どれだけ本を読んでも、映像を見ても実際に触ったことのない楽器は上達しません。

そのために、ドッグトレーナーを使ってください。

あなたが自分の犬に信頼され、よい関係を築くためなら、ドッグトレーナーはサポートを惜しみません。

自分の犬をしつけ、トレーニングするのはドッグトレーナーではなくあなたとその家族です。

人間側が一方的に貼り付けるレッテルを、犬の可能性を諦める言い訳にしないでください。

犬を飼ったなら、保護者としてしつけを施しトレーニングを重ねることで、人間社会に受け入れられやすい犬に育てましょう。

それが成果を上げたとき、あなたは今よりもっとたくさんの自由を犬に与えてあげることができ、本当に家族の一員としてどこへでも一緒に出掛けられるようになるでしょう。

さあ、あなたも自分の犬と楽しみながらトレーニングを始めましょう！

「人とペットの暮らし方の可能性」を感じていただける書籍にしたいという思いから執筆活動をスタートさせました。

「なぜあなたが犬に関する本を出版するのですか？」

このような言葉をいただいたこともあります。

なぜなら、私は犬の専門家ではないからです。

これまで人材教育や経営コンサルティングという業界に身を置いてきましたが、ある人物との出会いが本書を執筆する原動力となりました。

それは一人のドッグトレーナーです。犬に対してとても深い愛情を持って活動をされてきました。

その方の夢や想い、そしてペット業界で実現したいことやそれに対する問題意識を聞くうちに、心の底からその人を支援したいという気持ちが芽生えました。

この気持ちがあきつかけとなり、ペット業界での活動がスタートしたのです。

常に心の中にある言葉があります。

『国の偉大さ、道徳的發展は、その国における動物の扱い方で判る』

これはインド独立の父として知られるマハトマ・ガンジーの言葉です。

日本は海外と比較して「ペット後進国」といわれています。

ドイツ・イギリスなどが比較対象として挙げられますが、確かに言われてみれば、ペット後進国と捉えられても仕方のない側面が見受けられます。

国民性・文化・風習、そして制度に大きな違いがあるため、海外で行われている取り組みをそのまま日本に持ってくるのがいいという話ではありません。

皆さんに知っていただきたいのは、日本のペット環境はまだまだ改善の余地があるということです。

ペット環境が改善されれば、飼い主さんにとって過ごしやすい社会が実現されるはずです。

では、そのようなペット社会がどうやって実現されるのか？



まずは、飼い主さんの行動の変化が必要になります。

今の愛犬の姿を生み出しているのは他の誰でもないあなた自身なのです。

つまり、あなたの思考が変われば愛犬も変わるということです。

無意識のうちに諦めていた理想の姿を思い描き、それを目指してください。

また、私が本書を執筆するもう一つの想いについてもお話しさせていただきます。

それは飼い主さんに“ドッグトレーナー”という存在を正しく知っていただくことです。日本ではまだまだドッグトレーナーという職業が確立されておらず、誤解されているケースも多く見受けられます。飼い主さんにドッグトレーナーのイメージをお聞きすると「怖そう」「厳しそう」「男性が多そう」という言葉が出てきました。

このような印象を持たれている方は多いのではないのでしょうか？

実際は女性のドッグトレーナーも多く、飼い主さんに寄り添いながらトレーニングをされている方を多く存じ上げています。飼い主さんとの会話を大切にし、犬のことを一生懸命に考え、常に最良の方法を模索している方々なのです。

あなたの身近にいて、愛犬について気軽に相談できる、とても心強い存在なのではないでしょうか。

ペット業界に染まっていない人間だからこそできることがたくさんあると思っています。

業界の外だからこそ見える世界があります。それをしっかりと伝え、少しずつペット社会の実現に貢献していくことが使命だと感じています。

本書を通して、愛犬の可能性、そして、ドッグトレーナーという人たちについて興味を持っていただくきっかけとなればとてもうれしく思います。